

① テーマ「下村寅太郎と西田哲学」

Shimomura Toratarō and Philosophy of Nishida

② 趣旨

「精神史」という独自の方法論により切り開かれた下村の哲学には、期待される研究の大きな可能性が潜在している。下村哲学はライブニッツ、数理哲学、科学哲学、ブルクハルトなどの研究という豊かな側面をもつ一方、西田哲学研究は下村の思索の一つの一大中心であったと言える。この度、「下村寅太郎と西田哲学」をテーマとし3名の提題によるパネルをご提案させて頂く。

1 藤田正勝 「西田・田辺哲学と下村寅太郎——「歴史」をめぐる」

下村はその前期の著作のなかで科学や数学の問題と取り組んだが、とくにそれを「歴史」という視点から捉えようとした。そのような自らのアプローチを踏まえて、下村はしばしば西田・田辺がロジシャンであったのに対し、自分はヒストリアンであると語っている。そこには西田・田辺への批判が込められている。下村は西田・田辺哲学のどこに不十分性を認めたのかをまず明らかにしたい。それを踏まえて下村の科学・文化・哲学についての理解の独自性を明らかにしたい。

2 樽沼範久 「戦争の哲学/戦争と哲学——西田哲学と下村寅太郎」

戦争は西田の命運をも左右する歴史の危機的局面だったが、「京都学派」と戦争の関係を歴史の外から断罪して自足するわけにはいかない。戦争は今、我々の世界の地平からも消えることがない歴史の現実であり、また戦争は思考を強いて、哲学をも起動する歴史の出来事であるからだ。下村は生涯を通じて、「戦前、戦中、戦後」にかかわらず、このことに意識的だったようだ。本発表は西田の 1930 年代以後の歴史哲学とも対比させつつ、戦争を下村の思考の主動機と見立て、下村哲学の特異性を描き出す。

3 上原麻有子 「『モナ・リザ論考』の位置づけ—西田哲学を超えて」

下村は、「西田哲学について」(1947)の中で、「京都学派の人々の業績」は、「西田哲学の特殊問題の追及」であってその「真の批評」はまだできていない、「真の西田哲学の後継者」は、それを「克服する」ことだと述べた。彼自身、正に西田哲学を批判的に継承し、「精神史」的方法で独自の学際的研究を深めた哲学者であった。本発表は『モナ・リザ論考』(1974)をその成果の一つと見なし、下村によるこの絵画の芸術、技術、哲学、歴史を交差する考察が、いかに西田哲学を乗り越えたのかを検証する。

③ 代表者:上原麻有子・京都大学(B 会員)

Uehara Mayuko, Professor, Kyoto University

④ 発表者一覧: 藤田正勝・京都大学名誉教授

Fujita Masakatsu, Professor Emeritus, Kyoto University

樽沼範久・横浜国立大学教授

Kurenuma Norihisa, YOKOHAMA National University

上原麻有子・京都大学教授

Uehara Mayuko, Professor, Kyoto University

⑤ 使用言語: 日本語

—以上です—